

林安希子（著）ジョセフ・トービン（協力）
『幼児教育のエスノグラフィー—日本文化・社会のなかで育ちゆく子どもたち—』
2019年 明石書店 A5判 224頁 定価（本体2,700円+税）

瀬尾 知子*

私たちは、生まれた瞬間から、社会の一員として生きていくための、特定の話し方や動作といった行動様式を学ぶ。本書は、幼児教育現場の詳細な観察と幼児教育者へのインタビュー調査から、日本の幼稚園、保育所（以下、園とする）といった特定の社会の中で、子どもたちがいかにして、状況に応じた行動様式を学び、その社会の一員となっていくのかについて論じている。そして、子どもの社会性や情緒発達を支える保育者の役割について質的分析と解釈を行うことで、幼児教育に埋め込まれた文化を浮き彫りにし、日本人らしい教え方や考え方はどのようなものなのかといった問題に果敢に迫った一冊である。本書を通して、日本の幼児教育者が日々の日常の園生活で当たり前のこととして行っている保育実践の意義を改めて見出し、文化という視点から日本の保育・幼児教育を再考することができる内容となっている。

本書は、Hayashi, A., & Tobin, J. (2015). *Teaching Embodied: Cultural Practice in Japanese Preschools.*: Chicago: University of Chicago Press.が原著となっており、林安希子氏がジョセフ・トービン氏との共同研究の成果をまとめ、日本の読者に向けて執筆したものであり、全7章から成る。

「見守る」と称された1章では、くまのぬいぐるみを巡るけんかの場面と、綱引きを巡る言い争いの場面において、保育者があまり介入しないという幼児教育者のアプローチの仕方に着目して、いかに「見守る」という概念が日本の幼児教育で強調されているかについて語られている。「見守る」は、単に見るという意味だけでなく、存在を感じさせるという意味合いも持ち合わせており、そこには日本の幼児教育に独特な身体技法があることが論じられている。保育者が「見守る」という暗黙の教授法を実践することで、子どもたち自身で問題解決しようとする自信や安心を与え、子どもの社会的な関わりを支援していることが描かれている。そして、「見守る」は相互的なものであり、他者を「見守り」他者に「見守られる」といったお互いを気にかける相互の責任を強調する社会へと橋渡しをする実践であることを示している。

「気持ち」と称された2章では、園での一斉活動、食事場面、登園、喧嘩を巡るやり取りの場面における、身体的感情体験への価値観に着目している。ここでは、日本人の精神的概念や文化的価値を理解する上で、重要となる「寂しさ」「甘え」「思いやり」といった身体的感情体験を、日本の園では、子どもたちがいかに多く提供しているかを示している。そして、身体的感情体験は個別の事象ではなく、間主観的であり、連続性があることを論じている。

「ギャラリー」と称された3章では、けんかをしている当事者に焦点を当てるのではなく、けんかをしている当事者の周囲にいる子どもたちである「ギャラリー」に着目し、保育者が、子どもたちのけんかに積極的に介入しないという、暗黙の実践知について述べられている。子どもたちにとって、「ギャラリー」といった周辺参加の経験は、疑似感情を経験し、他者の気持ちに共感するといった学びの機会をつくりだしている。また、子どもたちが周辺参加をすることは、けんかをしている当事者に、他者の視線の力「世間の目」を知らせる状況をつくりだし、子ども同士のけんかを仲裁する役目も果たしている。そして、日本の幼児教育者が、「ギャラリー」の存在に価値を置き、けんかをしている当事者だけでなく、周辺参加の子どもたちの支援も行っていることが、社会の一員としての振る舞い方を学ぶ重要な機会となっていることが描かれている。

「身体文化」と称された4章では、子どもたちの園での言葉遣いや身振り、手振り、お辞儀といった日

* 秋田大学教育文化学部准教授

常的に行われている関わりから、子どもたちがどのように、「日本人らしい」振る舞い方を学ぶのか、状況と「はじめ」、空間における身体性の関係から論じている。そして、子どもたちが「日本人らしい」振る舞い方を学ぶ過程において、保育者が決して強制して教えるものではなく、子どもたちに繰り返し学ぶ機会を提供することで、暗黙的に教えていることが述べられている。つまり、園での生活を通して、子どもたちは日本人に特徴的な身体実践を学んでおり、日本の園は、社会の一員としての振る舞い方を学ぶ重要な場となっている。

「幼児教育者の専門性」と称された5章では、経験豊富な保育者に、保育経験が浅い時期の映像を見せてインタビュー調査をすることで、熟達化の移行がどのようになされるのか、保育者の専門性の発達過程の解明を試みた内容となっている。そして、「余裕」という言葉をキーワードとして、初心者と熟練者の違いについて論じている。また、保育者が熟達化する過程においても、経験を多く積んでいる保育者が経験の浅い保育者に対して直接的な助言をすることはあまりなく、「見守る」というアプローチで、保育者の専門的能力の開発を支援しており、日本人の根底にある文化的教授法は「見守る」ことであることが明らかにされている。

「文化的実践としての幼児教育政策」と称された6章では、「見守る」という最小限の介入の原理が、保育者から子どもたち、園長から保育者、文部科学省・厚生労働省から幼稚園・保育所に対してというように、日本の幼児教育の様々なレベルで作用していることを論じている。「見守る」という暗黙の文化的教授法は、政府からのガイドラインで示されているわけでもなく、養成校で教わるわけでもないが、保育・教育実践の重要な部分で機能している。しかし、この暗黙の教授法が、保育者や教師がこの教授法に自信を持つことができない状況に直面していると感じたときには、より明確なアプローチへと移行する脆弱性を孕んでいることも指摘している。

「文化の再構築」と称された7章では、1章から6章までで取り上げた、全トピックが、園生活の中で、どのように実践されているのかを、年長児が乳児にご飯を食べさせる場面と、くまのぬいぐるみを巡るけんかの場面を具体例として取り上げ述べられている。そして、各章で取り上げた、見守る・身体的感情体験・ギャラリー・身体性・専門性・幼児教育政策がひとつの出来事の中に存在することが示されている。さらに、これらのトピックがひとつの出来事の中に複雑に絡み合いながら相互的に構成され、保育実践が行われていることを示した内容となっている。

本書は、3つの幼児教育現場の詳細な観察と、幼児教育者のインタビュー調査の結果をもとに、文化人類学の視点から、鋭い洞察力で、日本の幼児教育、園での生活を通して、子どもたちがいかにその社会の一員になるのかを描いている。そして、その子どもたちの社会性を育み、情緒発達を支える保育者自身がどのような信念のもと、保育実践を行っているのかを論じている。本書を通して、日本の保育実践の特質について学ぶことは、保育実践をおこなう上で、教育的関わりに関する有用なヒントを得ることが可能となり、どのような実践が望ましいのかについて再考し、自らの思考を広げることに寄与するであろう。

本書の調査対象となっているのは、幼稚園・保育所に通う子どもたちであり、保育実践を実際に行っている保育者である。しかし、ここでは、幼稚園教育の特質、保育の専門性を超えて、保育実践という窓を通して日本文化を見ており、子どもたちが園生活を通して、どのように日本文化に誘われ、「日本人」となるのかについて論じられている。グローバル社会に生きる私たちが、どのようにして自国の文化を身に付けていくのかを知ることは、自分自身を理解すること、さらに、自国と他国の文化をより深く理解することにつながるだろう。本書は、幼児教育に携わる研究者、保育者に有益な一冊であるが、文化人類学、日本文化に興味を持つ読者も興味深く読み進められる内容になっている。幅広い読者が本書を手にすることを期待する。